

朗 読 文

北アフリカのサハラ砂漠の中央に、タッシリ・ナジェルと呼ばれる高い岩山が連なっている。その谷間で、今から五十年前前、岩壁に描かれた多くの絵が見つかった。動物を追いかける人、棒や弓で戦う人、踊っている人、ゾウ、サイ、キリン、カモシカ、ウシ、ダチョウ、ウマ、ラクダなどに混じって、不思議なことにカバの絵が描かれていた。カバは水辺に住む。そんな環境が近くにあったのであろうか。

さまざまな科学調査の結果を総合すると、確かに大昔ここにカバがいたという答えが出てきた。つまり、はるか昔、実はこの一帯は砂漠ではなかったのである。

第一に、岩に描かれていた谷間から、昔の人間の住居の跡や、たき火の灰と一緒にカモシカやカバなどの骨が見つかった。この事実は、昔近くで人間がこれらの獲物をつかまえ、その肉を焼いて食べていた証拠で、やはり近くにカバがいたことを教えていた。

第二に、絵の画かれた順序が明らかにされた。時代が経つにつれて、絵の描きぶりがうまくなる。ところによっては、古い絵の上に新しい絵が重ねて描かれていた。そうした点を調べて、画かれた時代順に動物を並べてみると、驚くべきことがわかった。ゾウ、サイ、カバなどは早くいなくなっていた。そのあとには、カモシカの時代、ウシの時代、ウマの時代、ラクダの時代順になっていた。水と草がたっぷり必要なカバの絵が古くて、水と草が少なくてもよいラクダの絵が新しいのは、だんだん水が少なくなり草がなくなつて、ついに砂漠になつていったことを示していた。

第三に、昔の湖の規模や植物の分布が調べられた。今もサハラ砂漠の南にチャド湖という大きな湖があるが、昔はもつと広くて深かった。というのは、水がたくさんあつたからである。また、この湖の底に積もつた泥の中から昔の花粉の化石を取り出して調べてみると、今から二千五百年以上前は、水が多く必要な種類の植物がこの地帯に繁茂していて、その花粉が運ばれ、湖の底に泥とともに積もつたことがわかった。

これだけ証拠が揃えば、もう誤りはない。今から五千年前のサハラ一帯は、見渡す限りの草原で、山には林があり、あちこちに大きな湖があり、川が流れていた。そして、そこにはカバが住めるだけの水がたえられていた。しかし、その後だんだん雨が降らなくなり、乾燥が始まった。その結果、二千五百年位前から、あたりはすっかり砂漠に変わってしまったのである。